

編集者のことば

本号は、「多摩地区総合調査」研究報告の第3回を特集した。

その第1回は、第9号に特集された。第2回は、第10号の特集テーマとしてはかかげられなかったが、その中で、むしろその実体として、表紙と目次に表示されている。3回を通ずる研究の趣旨は、古屋野正伍前教授と石田頼房助教授とが、それぞれ第9号と第10号の巻頭で述べているとおりである。

第3回目ともなると、研究の進展を反映して、この調査計画をうみだした総合テーマである「大都市問題の総合的研究」に属す二つのサブ・グループから、それぞれ報告が提出されたことになった。1は、「社会生活上の諸問題」をテーマとするサブ・グループが、「大都市における社会生活上の居住性」について提出する3論文と、大石助教授の1論文である。2は、「住民心理の研究」のテーマによるサブ・グループが、「集合住宅の居住者の心理特性」に関し提出する、4論文である。

第1のサブ・グループの3論文は、独立の論文の形をとっているが、内容的に言えば、いずれも第9号に報告された論文「大都市社会生活上の居住性」を継続、発展させたものである。3論文にまたがる全体テーマとしての名称がひきつづき採用されているのは、この理由による。3名の筆者のうち1名がそのテーマ1名に(Ⅱ)を付けたのは、当人が第9号の論文で分担した1節のテーマ名をそのままひきつづいだからである。なお、石田頼房助教授の連載論文は、今回の特集テーマに直接かかわるものではないが、東京ないしわが国の都市計画の発展について丹念な歴史的研究をすすめるもので、まさしく基礎研究と言うにふさわしいものである。

本号で、本誌は発刊4年の歴史をきざんだことになる。その最後にあたる本号が、現在の切実な問題である多摩ニュータウンの形成展開について理論研究の立場からするアプローチと、同時に、現在カレントな問題ではないとしても東京ないし都市を正確に理解するものに不可欠な基礎研究と、二つの型の研究報告の成果を掲載できた。このことを改めて知ると、都市研究センターも、本誌も、その目的の方向に動きつつあると言ってよいのではないかと思われる。これをさらに確実に迅速なものにしてゆくことが、つぎに来る年へのわれわれの課題である。それとともに、その動きがよりよくできるように諸方面から援助と激励が与えられるよう、望んでやまない。